

栄光

説教・「キリストに 做う者とされる」	大澤正芳牧師…1
特集・2025年 心新たに…	…2
大澤正芳牧師と の懇談会報告…	4
説教・「マリアと ヨセフのクリスマス」	岸俊彦牧師…5
転会・高山宇佳…	6
図書茶話会報告…	6
西南支区役員 研修会報告…	7
長老のファイル…	7
牧師の書齋から…	8

説教

『キリストに做う者とされる』

テサロニケの信徒への手紙1章2節～10節

栗平教会牧師 大澤正芳

使徒は、言います。「神に対するあなたがたの信仰が至るところに伝わっているので、私たちはもう何も語る必要はありません」。伝道の志に生きている教会に対して、何か付け加えて語る必要はありません。皆さんもまた、私達栗平教会を生み出した、伝道の志に生きる群れです。とはいえ、パウロはなお語ります。しかし、それは、テサロニケ教会の存在をなぞる言葉です。あなた達はこんな恵みと志に生きていますね。君達のことを思い起こすと、私は神様への感謝でいっぱいになる。君達もまた、同じ伝道の志に生きる仲間だ。こんな風に喜び合っている人達

は、実際にどのように伝道しているのでしょうか。6節以下によれば、使徒は、言います。「神に対するあなたがたの信仰が至るところに伝わっているので、私たちはもう何も語る必要はありません」。伝道の志に生きている教会に対して、何か付け加えて語る必要はありません。皆さんもまた、私達栗平教会を生み出した、伝道の志に生きる群れです。とはいえ、パウロはなお語ります。しかし、それは、テサロニケ教会の存在をなぞる言葉です。あなた達はこんな恵みと志に生きていますね。君達のことを思い起こすと、私は神様への感謝でいっぱいになる。君達もまた、同じ伝道の志に生きる仲間だ。こんな風に喜び合っている人達

対処するために、第2の手紙を書くことになったのです。けれども、なお、私たちキリスト者は、いつでも躊躇なく言えるはずなのです。「私に做う者となってください。こんな私の真似をしてください。私はキリストに做う者だから」。もしもここで言われている「做う」、真似をすることが、私たちがパウロどころかイエスさまを模範とする生活を、自分を奮い立たせて形作っていくことであれば、これはもうお上手です。しかし、ここで使われている「做う」というギリシア語は、単なる自動努力による模倣ではありません。現代のある社会学者は、ここで使われているギリシア語は、「感染的模倣」と訳すべき言葉だと言います。イエス様の命が、うつつてくるのです。使徒の生き方に感染してしまふのです。つまり、パウロは、テサロニケのキリスト者たちに、「君達も、私と同じようにイエス様の命の火が燃え移ってしまっているね」と言っているのです。

も、キリストの命の火が燃え移っていない人など教会に存在しません。今、ここで私達は神を「我が父」と呼び、礼拝しています。キリストの命が燃えついているからです。そこに私達の感染的模倣がはつきりと見えるものとなっています。このような私達に做う者となつてほしいのです。私達と同じように、どのような欠け、弱さを抱えていても、人生の浮き沈みのいかなる瞬間にあつても、神を、「私のお父さん!!」と呼んでほしい。御子の命が燃えついた、そういう私達を真似てほしいのです。

光の降誕祭とも呼ばれるクリスマスを抑えたこの季節、私は、昨年「なくなった先輩牧師の言葉を思い起こします。」「いいかい、君、我々キリスト者は破れ提灯だ。破れ提灯、破れてぼろぼろの提灯でいいんだ。破れていた方が、中のキリストの光がよく見えるだろ」。時代が変わり、牧師が変わつても、ここで燃え続けるのは、信仰の弱い者を選び、消えそうになれば、また燃やしてくださいさるキリストの命です。その御子の命が漲る、喜ばしい経堂北教会であります。

2025年 心新たに



2025年がスタートしました。

「一年の計は元旦にあり」。何事もはじめに計画あります。

今年のあなたの目標は何でしょう？

気持ちを新たに

稲葉美津子

昨年暮れ、岸牧師先生より『栄光』新年号の原稿依頼がありました。その時、私の兄が危篤の状態でしたが、お引き受けすることにしました。岸先生からの最後の原稿依頼ということですし、不安な状況をただ待つのではなく、何かしたかったからかもしれませぬ。ですが、その後兄の容態は急変し、2日後に召天しました。兄家族、兄弟たちと葬儀の詳細の相談で、兄の母教会である柿ノ木坂教会の渡邊義彦牧師に司式をお願いしたい思いが一致したので、私が電話してお願したところ、快くお引き受けいただいたので本当に嬉しく感謝で一杯です。

柿ノ木坂教会は、兄が大学生の時、中高からの友達のご家族皆さんが教会員で、その友達に導かれて受洗した教会です。その頃は熱心な信者で、その後母、私と続いて導かれ受洗したのです。家は世

田谷ですが3人で毎週通いました。兄は会社に入り、私も入社、結婚、子育て、と教会から離れてしまいました。そんな幽霊会員の兄の葬儀にいらしていただけたのは本当に有難いことです。ただ、昨年7月に渡邊牧師が、経堂北教会へお説教にいらした時、兄と兄嫁と3人で礼拝を守り、先生にご挨拶できたのです。この時までにはギリギリ杖をついて一人で歩けた最後の頃だったので、神様が守ってくださいました。

お引き受けいただいたので、私は次の日曜日に経堂北教会ではなく柿ノ木坂教会へ行き、礼拝後先生に葬儀へのお願いと感謝をお伝えすることも出来ました。その後、かつてお会いしていた方たち5人位が私の傍へいらしてください、何と60年近い年月が経っているのにもかかわらず話に花が咲き、高校生の頃が蘇る思いでした。

柿ノ木坂教会の礼拝に行き、大昔の受洗した頃の気持ち、初心を思い出したような、心が洗われたような気持ちになりました。新年にあたり、再度気持ちを新たに神様と共に歩んでいきたいです。

絆を大切に・健康で

岡本四郎

先日、人間ドックを受けたところ、血圧とコレステロール値、その他にも基準値を越えるものがあったため、再検査を受けることになりました。

これまで急病で手術や入院したことが数回あり、その都度家族に心配をかけてきましたが、毎回大事には至らず短期間で復帰できました。

もともと体力には自信があったのと普段から禁酒・禁煙・運動を心掛けていることもあり、自分は普通より軽く済むのは当たり前と思ってきました。

しかし、今まで平均より低目であった血圧が突然高くなったのは驚きました。

食事や運動など日常生活に思い当たる原因がなかったのでしょうか、三日後にサラリーマン時代の同期の友人グループの会合があり

ました。

久しぶりにみんなが集まるとすぐに昔のように大いに盛り上がり、楽しい一時を過ごすことができました。

他にも学生時代の部活仲間の会など定期的に集まる機会がありますが、いずれの会でも最近必ず話題になるのが病気や介護、それに寂しいことですが、先輩や友人が亡くなった話はみんな身につまされいます。

私も新年で79歳、この歳になるとみんな体力・気力・知力が衰えてきていることを思い知らされました。

特に記憶力の衰えは共通の悩みで、私もせめて進行を遅らせるのに効果がありそうなことを今年から何か始めねばと考えています。

体力が人並以上にあると過信することなく、肉体の衰えを謙虚に認め「主から受けたすべてを、ふたたび主にささげて」（讚美歌 21・18）と歌われているように、今までの恵みに感謝しつつ、健康に留意しながら家族や友人たちとの絆を大切に過ごしたいと思えます。

こころを高くあげよう

岡田映子

1月2日は我が家の全員集合の日で、もう何年になるでしょうか、息子2人と男孫4人にお嫁さん3人を交えた総勢11名になる集まりです。一番上の孫は3年前家庭を持つて巣立ち、一番下は今年成人式を迎えます。

主人の一声を皮切りに、各自現況報告と新年の抱負などを聞き、箱根駅伝を応援しながらお寿司を食べ、お年玉を貰って一休みすると、私たちが疲れないようにとの配慮からかさつと帰ってしまいました。若い世代の成長を見、それぞれの抱えている課題に何とか頑張っただけだと祈っています。

大波が引いたような静かな夕方、いつもにも増して寂しさに包まれます。私たちは80を過ぎ、老いの急坂を下っている昨今ですが、うなだれないで上を見上げていきたく願っています。

さて、私は教会の旧約の学びと

新約の学びの会に出席しています。旧約の学びは、3千年前の王国時代のルツ記から始まり、サムエル記上下、列王記上下、エゼキエル書と進んで、去年の11月、ダニエル書を読み終えました。

一人では開くこともしない旧約ですが、輪読ではなく、プロによる聖書朗読を聞いて、配布されるプリントに沿って要点について学び、毎回論しを受けています。

また、新約を学ぶ会ではヨハネの黙示録を学んでいます。同時進行の黙示文学の幻は、旧約がキリストを預言し、新約はその預言の実現であることを教わりました。

学びのための準備から詳しい資料の作成まで、何もかも岸牧師のお働きに心から感謝しています。

私たちはいつも道を逸れてしまう弱い者ですが、その都度悔い改める信仰をいただいています。終わりの日の幻を少しでも分らせてください。年齢のせいにはしないで、面倒くさがらず、丁寧な暮らしを心掛けたいと思っています。

讚美歌第2編1番「こころを高く上げよう」の歌詞とメロディが響いてきます。

健康で過ごす

角田 晋

新年を迎えて、元気で信仰生活を送るためには、健康を与えられよう日々神に感謝し、祈ることであろう。

職業柄、また学生時代に病気をしたこと、健康について、特に気を付けている。健康には、肉体的な面と、精神的な面があると、思うし、ともに趣味的なことに大きな要素があると考えているので、このことを書いてみたい。

肉体的な健康では、以前は登山やスキーをしていたが、年齢的なことでもう無理である。現在していることはウォーキングが唯一の健康法であり、一日一万歩で、その半分ぐらいは速く歩くことを目標にしている。

また、精神的な健康法としては、クラシック音楽を聴くことにしている。現在では歩行中でも簡単に録音されたもので聴けるようになった。ラジオからの録音では、

なんでも聴いているが、好んで聴くのはドイツ音楽で、特にバッハである。バッハに傾倒したのは、学生時代にマタイ受難曲を聴いてからだと思う。ドイツに行った時には、ライプツィヒやアイゼナッハを訪れ、バッハがルターの影響を受け、十字架の音楽家と言われているのも頷けた。

それ以前のことになるが、大学卒業後、カンタータ全集が発売されることを聞き、興味を持って買っていたが、今年に心新たに作曲年代順に、聴くことにしたい。

調べたら、教会カンタータは全曲で202曲あるが、1曲目が1707年の作曲で、1723年から1726年の間に134曲作曲されている。ちょうど、今から300年前前後のことである。これらのことを考慮に入れ、バッハとともに、十字架を思い、過ごしたい。

大澤正芳牧師との懇談会報告

この4月に栗平教会に転任された大澤正芳牧師。先生は、栗平教会が経堂北教会の創立40周年の開拓伝道の働きによる百合丘伝道所の誕生からということ、開拓伝道という同じアイデンティティ・信仰の姿勢・血筋を持った教会であることを丁寧な語りで語ってくださった。

牧師交代は、牧師と信徒が一つとなって作り上げてきた二人三脚の歩み・呼吸が緩む一つの危機であると捉え、この1年間に教会と縁のあった様々な教師を招いて福音を聞くことが「変わることにない神様のみ心」に目を向ける訓練の時、新しい牧師を迎える準備・細やかな配慮、栗平教会もその中に加えられる感謝だとおっしゃった。

「伝道の篤い心、神様が建てられた福音を世に伝える伝道する教会であり続けること」を共有したいとの力強い語りに励まされた。

先生は栗平教会の目指す所はと問われ、時間をかけ教会員に寄り添いながら共に歩み、祈りをもつ

て方向性を考えていくと語られた。私たちもそれに倣って、落ちて着いて松谷祐二先生と共に祈りを合わせ、主に導かれて行けばよいのだろう。

すでに栗平教会の長老会との対話から「伝道したい」という思いを感じ取り、「ここに栗平教会がある」ことを知ってもらうために社会的関心を持っている方々に目を向け、人権問題について青山学院大学宗教主任の森島豊先生を招いて秋の講演会（伝道という言葉を使わないのがミソのこと）を実施。「説教の恵みを分かち合う会」を持つなど、教会員と共に栗平教会を力強く牧会し始めておられる。

交換講壇の再開の希望もあり、2月には夫人の大澤みずき牧師にも説教奉仕をお願いする計画がある。これからの交わりがとても楽しみにになった。（小嶋幸子）



説 教

『マリアとヨセフのクリスマス』

ミカ書5章1節～5節
ルカによる福音書2章1節～7節

岸 俊彦

ルカはクリスマスをも、ローマ皇帝アウグストゥスが実現したローマの平和を舞台として語ります。まことの神の子は皇帝か、それともベツレヘムの片隅に生まれた御子か。福音とは何か、私たち一人ひとりに問うためです。

前9年のプリエネ（トルコ西岸）の碑文なら、アウグストゥスこそ神の子であり、彼の誕生日こそ福音です。それに対して、最初の福音書を記したマルコは、「神の子イエス・キリストの福音の初め」（1：1）と書き出しました。そして、キリストの受洗、荒野の誘惑、伝道開始と続けます。クリスマスについて全く語らず、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい」（1：15）とキリストの第一声を記しました。

は身重だったマリアを連れて、ガリラヤのナザレから故郷ダビデの町、ユダヤのベツレヘムに旅をしなければならなかったと伝えます。山あり谷あり荒野野ありの百キロほどの道のりを、二人は旅しなければなりません。ベツレヘムに着いてみれば、二人には休むところがありませんでした。初めての赤ん坊の誕生は、二人にとつてどんなに大変なことだったでしょう。しかし、「神にできないことは何一つないのです（ルカ1：37）。二人は御言葉を信じています。神の備えが二人と赤ん坊を守ります。マリアは主の仕え女です。ヨセフも主の僕です。二人は主のものです。

示唆する奇跡は起こりません。しかし、マリアとヨセフは必死で我が子を、そして神の子を迎える準備をしました。キリストを迎えるためにどれほど走り回ったことでしょう。赤ん坊が生まれることは大変なことですが、不安もありません。が、どんなに嬉しいことでしょう。自分たちに子が生まれることは、いえ、世界中の人々のために神の子が誕生することは奇跡です。

ルカ2：11「今日ダビデの町に、あなたがたのために救主がお生まれになった」
ベツレヘムという町の名にはパンの家という意味があります。キリストは「パンの家」に生まれました。このことは、私たちが祝う聖餐を思い起こさせます。そしてキリストは飼いや葉桶に寝かされた。飼いや葉桶も家畜たちの餌箱です。家畜は飼いや葉桶の餌を食べ生きて延びます。皆がキリストの命をいただくために、その命によって生かされるために、キリストはこの世界に来てくださいます。パンの町に来てくださいます。飼いや葉桶の中に来てくださいます。

ました。そして、やがて来てくださいます。私たちはパンで生きるのではありません。キリストの命で生きるのです。神の言葉であるキリストの命をいただいで生きることができます。

人は生まれた時から死にゆく罪人です。まことの人として生まれたキリストも同じです。最期は十字架の死を遂げ、墓に横たえられます。キリストは私たちと同じように生きて死ぬために、まことの人となられました。理解されなくても、はじき出されても、私たちのもとに来てくださいました。余裕のない私たちのために来てくださいました。そして再び来てくださいます。

(クリスマス礼拝説教)

転会おめでとー！

神に祈りを

高山宇佳

神様にお祈りをささげて、果たしてどのようなお祈りは聞きいれてもらえるのだろうか。クリスマスチャンの友人で神に、どうか車を与えてくださいと必死に祈る方がいました。一生懸命祈り続けましたが車が与えられる気配はありません。次に知人が家族のビザの手続きを神に祈っていました。長期間祈っても特に何も起こりませんでした。

では、教会はどうでしょうか。すると、なぜか与えられたのです。何故、車もビザも与えられることはなかったのに、しかし教会を与えてくださったのか。おそらく、これが隣人愛に該当する行為であると判断されたのかもしれない。

隣人愛は聖書によれば、神を愛することの次に重要で最も重要な

律法（戒め）であると書かれています。マタイの福音書やヤコブの手紙、レビ記などにも書かれています。つまり、祈りが聞ける律法でした。つまり、祈りが聞き入れられるか否かは、祈りの文の長さ、期間の長さ、声の大きさ等はあまり関係がなく、聖書の言葉に該当するかどうかが重要視されているのかもしれない。

つまり、神様に祈ることとは、神様がアラジンの魔法のランプのように、あなたのお願いを叶えるということではなくて、私たちが神様への感謝と聖書のみことばを実現していかなければいけない行為だったのかもしれない。最初は、よくわからずに色々、いい加減に祈ったりしたことを神様に申し訳なく思いながら、どんな小さな祈りでも、聖霊を通過して、すべてを聞いてくださるようです。から、みことばに叶うお祈りであれば、喜んで聞き入れてくれるかもしれません。

祈りを通じて、このような素晴らしい教会を与えてくださった気前よいめぐみ深き神の恩恵に感謝しつつ、今後もみことばを実践できるといってお導きください。

図書茶話会報告

12月1日の礼拝後、図書茶話会を開催いたしました。委員4名に加え、委員以外の方7名、計11名が集い「私の1冊」をテーマに本の紹介をしていただきました。

従来の茶話会は、教会員の方でなたか1名に本の紹介を依頼していましたが、それでは依頼される方の負担が大きいのではないかと、新年度の図書委員会が発足したタイミングで今回の「全員参加型」のスタイルを提案いたしました。8月頃から、私の人生の1冊、あるいは心に残る1冊を御紹介くださいと告知し、委員のボックスに投函していただきました。8冊の紹介本が集まり感謝です。

茶話会では、飲み物とお菓子を用意しました。少し張りきってしまい、量が多かったなど反省ですが、茶話会では各々読んだきっかけ、印象に残ったフレーズなどを紹介していただき、名著や初めて目にする作品が紹介され、あつという間の1時間でした。前のスタイルの茶話会がどうだと言うわけではありませんが、ただ誰かの話

を一方的に聞くよりも、双方に紹介し合うスタイルの方が、会が活発になりますし、とても刺激的です。幅広い年代の方に参加していただきましたが、自分の好きなモノを「私はこれが好きです」と熱をもって、人が人に語る姿は、いくつになっても、とても魅力的です。SNS全盛期の今では自分の趣味嗜好を伝える手段はいくらでもあり、とても簡単です。しかし今の時世、人が集まり、面と向かって「私はこれが好きです」と語る機会の方が貴重です。だからこそ、今回の新スタイルでの茶話会は、コロナ禍が明けて、少しずつ人と人との物理的な距離、あるいは心の距離を戻そうという思いも多少あったかもしれませんが、お茶菓子を用意することにこだわったのもそのためです。

またコロナがなかった、私が学生の頃の教会、子どもたちと一緒に各イベントにワクワクしていたあの頃の教会。完全に元通りにはありませんが、少しでも元に戻ればいいと願うのです。新しいスタイルで、ちよつとずつ、ちよつとずつ。

(諸橋鷹広)

西南支区役員研修会報告

11月23日に聖ヶ丘教会で「わたしたちの教会が立ち続けるために」という主題で西南支区役員研修会が行われました。

開会礼拝では平野克己牧師が、「私たちは自分の教会のことで心がいっぱいですが、西南支区には43教会があるので、この研修会で心の目が開かれ、縮こまっている私たちが元気になりますように」と励ましてくださいました。

「教会レポート」は用賀教会、世田谷平安教会、美竹教会からそれぞれ報告があり、コロナ禍を経た主日礼拝の様子や教会学校の取り組みなどを聞きました。用賀教会の報告は、参加者にQRコードを読み取ってもらいスマホ画面のHPを見ながらの教会紹介でした。続いて、伊藤英志牧師と大串眞牧師から発題がありました。伊藤先生は、今回の主題が「わたしの」ではなく「わたしたちの」となっているのがポイントで、「立ち続ける」ことが大事だとまず最初に言われました。三軒茶屋教会と駒澤教会の教会合併の事例を紹介さ

れ、「合同する教会は、普段から交わりがあることが大事で、役員、信徒の熱意と祈りが必要、合同することによって新たな可能性が生まれ、伝道を継承できる」と話されました。

2つ目の発題では、大串先生が兼務されている千葉支区のユウカリが丘教会と八街市伝道所の現状を報告されました。代務や兼務の話から、先生がこれまで経験されたご苦労以上に、そこに注がれた祈りとパワーを感じました。最後は、「もつと他教会から学んでもらいたい。諦めてなるものか。ここからです」と力強い言葉で。

グループトークは8名程の6つのグループに分かれ食事をとりながらでした。自己紹介を兼ねて、それぞれ自分の所属する教会のことを話しました。それまで聞く側だったので、皆さんとても活発に発言していました。同じ西南支区内、近くの教会でもお互いの活動や取り組みのことはほとんど知りませんでした。もつと「わたしたちの教会」のことを知りたい、と心の目に火を付けられました。

(沢田寛子)

長老のファイル

12月の経堂北教会でのクリスマス行事も終わりました。今年のクリスマスは礼拝、イブ礼拝には多くの人が集い、共に主のご降誕をお祝いすることができました。

自粛ムードも影を潜め、街中ではマスクをする人の方が少なく、外国の方を含む大勢の人が出歩くようになりました。しかし、寒さも厳しくなるなか、周囲でもコロナやインフルエンザの感染者が出ています。

そのため、イブ礼拝では茶菓は用意せず、讃美歌を歌う際にも着席して慎重さも残しながらの礼拝となりました。一方で、クリスマス礼拝後のCS教師と子どもたちのクリスマス・ページェント、イブ礼拝でのペンライト使用や聖書朗読、礼拝後のキャロリングなどクリスマスらしい要素が盛り込まれ、楽しまれた方も多かったのではないのでしょうか。

CSによるクリスマスのパフォーマンスは元々、岸先生のご発案から始まったのですが、そ

の岸先生にとっても、経堂北教会の牧師としての最後のクリスマスとなりました。

クリスマス礼拝の先生のお説教ではないですが、「そのうち牧師が変わったら」と言っていられないほど、もう間近にその時期が迫っております。そのため、4月の牧師交代に向けて、長老会でも色々な議論が為されています。

新しい牧師をお迎えするための牧師館のリフォームもそのひとつで、ようやく改修工事の立ち合いが終わり、1月18日には引き渡しがされることになりました。

また、一つひとつの行事のやり方、会計の手順含め、日常業務の牧師と長老の役割分担の見直しも検討されています。

そういう変革の時ではありますが、皆で協力し、主の導きに従って祈りを重ねつつ、新しい体制のもとでの経堂北教会がより一層、教会員の集いと伝道の場となるよう、歩んでいきたいと考えております。

(門田浩一郎)

牧師の書齋から

「最後の○○」と言わないつもりでしたが、「最後のクリスマス」「最後のご近所挨拶」などと、何かにつけて言ってしまう。そのおかげで、クリスマスに教会学校の出身者たちが教会を訪ねてくれました。この機会に誘ってくださった方のおかげです。

それぞれどんな歩みをしてきたのでしょうか。親になった人もいます。残念ながらゆつくり話す時間

はありませんでした。一人ひとりのこれからの歩みの上に主の祝福を祈りました。

受洗後別帳会員となった方が30年ぶりに声をかけてくださいました。「もうお目にかかることはな」と思っていて」と言われたのには、いささか寂しい気持ちもしました。現在は海外で生活しているとのことでした。問安委員会がクリスマスレターを送ってくださったことで「最後のクリスマス」と知って、ご挨拶に来てくださいました。細かい糸ですが、主がつかないで

くださっています。

大学時代の友人夫妻が、私の就任式に出席して以来22年ぶりに初めてイブ礼拝に出席してくれました。彼も昨年春定年となりました。彼から最終講義の知らせがありながら、こちらは都合がつけられず不義理をしてしまいました。チュービンゲンに留学時代、二人は朴憲郁先生ご夫妻と知り合ったのでした。キリスト者ではありませんが、不思議なつながりを感じます。二人は初めて私の説教を聞きまして、「42年間毎週説教してきただ

けのことはある」と言われました。つくばと世田谷の往復、集会の合間を縫って久々に訪問を行いました。お元気になった方もいらっしやいます。その反対の方もいらっしやいます。それぞれクリスマス喜びに満たされ、新年を迎えられるようにと祈るばかりです。

牧師館改修工事は足場が取り除かれ、全貌!?が現れました。立ち会って内部の説明も受けました。予定通り年明けに引き渡します。以前より格段と住みやすくなっていることでしょう。(岸俊彦)

個人消息



掲示板



- 20歳の祝福式 1月12日(日) 礼拝後
- 降誕節第4主日礼拝
1月19日(日) 午前10:15
説教 内村伸之宣教師 (ミラノ賛美教会)
- ルデヤ会主催講演会 1月19日(日) 礼拝後
講演「ウクライナで体験したこと」
内村伸之宣教師
- 降誕節第5主日礼拝
1月26日(日) 午前10:15
説教 菊地信行牧師 (西千葉教会)

編集後記



- ▽ 今年目標、筋力アップ。年々仕事での集中力が下がっているし親の介護度が上がっているの、体力をつけねば。(酒井)

「栄 光」2025年1月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧師：岸 俊彦
編集：栄光編集委員会
Email：kyodon@nifty.com
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp